

「十戒」と呼ばれる御教えは「戒め」というより「十のことば」(出 34:28、申命記 4:13,10:4)として描かれます。私は昔、「十戒」が罪を指摘し、キリストが「罪を赦す」という構図で理解していましたが、ここに神の民を創造しようとする神の熱い思いを見出すことができ、心から感動しました。しかも、安息日の教えに福音が凝縮されていると分かり感動しました。

人は、自分の都合に合わせた善悪を主張しながらも、どこかで全ての人に共通の道德律があると信じています。創造主の意図の原点を「律法」に見出せるなら幸いです。

<十のことばがイスラエルに与えられた目的と私たちにとっての意味>

「エジプトの地を出たイスラエルの子らは、第三の新月の日にシナイの荒野に入った」(19:1)と記されますが、彼らがエジプトを出た日は、第一の月の新月から十五日目(満月)ですから、第三の新月の日は約六～七週間後になります。それから三日目に、主がシナイ山に降りて来られ、律法を与えてくださいました。イスラエルは過越の祭り後の七回目の安息日の翌日(50 日目)を「七週の祭り」と呼びますが、それは彼らにとっては「律法授与の日」、私たちにとってはペンテコステ(聖霊降臨日)です。

この二つの関係こそ、旧約と新約の違いを理解する鍵になります。イスラエルの民は、乳と蜜の流れる地での生活に憧れたことでしょうが、神の第一の目的は、主(ヤハウェ)を礼拝する共同体の創造でした。これは今も同じです。

私たちがサタンの奴隷状態から救い出された第一の目的は一人ひとりが天国に入れられるため以前に、神の民に加えられ、この東京砂漠とも言われる地で、愛の共同体を形成するためでした。

パウロはそれを、「神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でした。しかし、心から(神に)従う者となりました、受け渡された教えの基準に向かって。それは罪から解放されて、義の奴隷とされたということです」(ローマ 6:17,18 私訳)と記します。

多くの人は「自由」を自分の意志のままに生きられることと誤解していますが、聖書の語る自由とは、罪の支配からの自由であるとともに、「神の義」の規準に従って、神に近づく自由なのです。

主はまず、「あなたがたは見た、わたしが…あなたがたを鷲の翼に載せて、わたしのもとに連れて来たことを」(19:4)とご自身の一方的な恵みによる解放を思い起こさせました。彼らは、海が分かれ、天からパンが降り、岩から水が沸くという不思議を通して、主(ヤハウェ)を知ったのです。

その上で神は「今、もし…確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたは…わたしの宝となる」(19:5)と言われます。神は既にイスラエルを「宝」と見ていたのですが、民の側にその自覚がなければ、本当の「神の宝」になることはできません。

また、それを「わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」(19:6)とも言い換えられます。「祭司」とは、神と他の民との仲立ちとなること、「聖なる国民」とは、神の聖さを表す民という意味です。彼らの選びには、世界中の人々をイスラエルの神ヤハウェに服従させるという責任が伴っていました。

それに対して民は、「みな口をそろえて、「私たちは主(ヤハウェ)の言われたことをすべて行います」と応答をします(19:8)。ただその後、彼らは自分たちの特権と表裏一体にあった責任を忘れ、神のさばきを受けます。それに対して、イエスこそがイスラエルの王としてこの使命を全うしてくださいました。

そして、この責任は現代のクリスチャンに受け継がれ、そのことをペテロは「あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の

驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです」(Ⅰペテロ 2:9)と記しています。

ところで、神が人間には近づくことのできない聖なる方ですが(19:10-15)、主は神がご自身の側から民に近づくために降りて来られるための備えとして、「三日目のために準備」(19:11,15)として、シナイ山の周囲に境を設けさすとともに、聖別のしるしとして衣服を洗うように命じられました(19:10,12,14)。

そして、「三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上であって、角笛の音が非常に高く鳴り響いた…主(ヤハウェ)が火の中であって、山の上に降りて来られ」ました(19:16-18)。

「角笛の音」は 16,19 節にも記されるように、人々にこれから語られることに注目させる警告の音でした。18 節後半は、山全体が、鉄を精錬する溶鉱炉のようになり、煙が円錐状に勢い良く立ち上り、それによって全山が激しく震えたようすを劇的に描きます。

太陽が少し地球に近づきすぎただけで、動植物は燃え尽きますが、その太陽の創造主がシナイ山に下って来るといいますから、それは恐怖に満ちた光景になるのは当然とも言えましょう。

私たちは、主(ヤハウェ)が私たちのただ中に住まれるということを、あまりにも自分勝手に都合よく解釈してはいないでしょうか。

しかもここでは、まずモーセがシナイ山の頂に登山する必要がありました(19:20)。それは標高 2,250m 程度もある高い山です。主は不思議にも、民が「見ようと」して「滅びることのないように」(19:21)、「祭司たちも自分自身を聖別しなければならない。主(ヤハウェ)が彼らに怒りを発することのないように」(19:22)、「祭司たちと民は、主(ヤハウェ)のところに登ろうとしては押し破ってはならない。主が彼らに怒りを発することのないように」(19:24)と言われました。

これは主(ヤハウェ)の「聖さ」が民の「汚れ」を「焼き滅ぼす」ことを避けるという意味でしょうか。主が民に制限を設けられる背後には、民を守りたいという愛の動機があるのです。

「それから神は次のすべてのことばを告げられ」(20:1)しました。申命記 5 章では「これらのことばを、主(ヤハウェ)はあの山で火と雲と暗黒の中から、あなたがたの集会全体に大声で告げられた」(22 節)と描かれ、神がモーセの仲介なしに民に直接語りかけたことが分かります。

しかもこれが後に神ご自身の手で二つの石の板に書き記され、契約の箱に納められます(申命記 10:4,5)。これこそ時間と空間を超え、すべての時代のすべての民に向けて語られた主(ヤハウェ)ご自身の「契約」(申命記 4:13)、最高の愛の教えです。

新約と旧約で、契約の内容が変わってはいません。そのことを主は預言者エレミヤを通して「そのとき、わたしは…新しい契約を結ぶ。その契約は…エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない…彼らはわたしの契約を破った…わたしはわたしの律法を…彼らの心に…書き記す」と言われました(31:31-33)。

それを受けてパウロはコリント教会に向かって、「あなたがたが…キリストの手紙であることは、明らかです…生ける神の御霊によって、石の板にではなく、人の心の板に書き記された」と記します(Ⅱコリント 3:3)。

つまり文言は同じで、与えられ方が変わったことが新しい契約の特徴なのです。キリストの御霊を受けいている私たちはこのままで神の愛を分か合う「キリストの手紙」とされているのです。

<前文> 「わたしは主(ヤハウェ)、あなたの神、あなたを奴隷の家から導き出した」(20:2)

神は「わたしは、ヤハウェ(「わたしは『わたしはある。』という者である」に由来)と紹介し、ご自身を「あなたの神」と個人的に語りかけ、「あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した」と事実を示してご自身の真実を示されました。

「十のことば」を、前文を省いて読まれることから、墮落した戒律宗教が始まります。

1. 「あなたには、わたし以外(わたしの顔の前)に、ほかの神々があってはならない」(20:3)

これは一人一人への愛の語りかけで、結婚の際、浮気をしないと誓わせることと同じです。当時のカナン人は陽気なバアルを拝んでしましたが、そこには退廃がありました。

私たちが主(ヤハウェ)を信じると言いながら「肉の欲、目の欲、暮し向きの自慢」(Iヨハネ 2:16)などを、主との交わりよりも優先することがないでしょうか。お金の管理は大切ですが、「金銭愛こそあらゆる悪の根」(Iテモテ 6:10 私訳)とも言われます。

2. 「あなたは自分のために、偶像(idol or carved image)を造ってはならない」(20:4-6)

この直後、イスラエルは豊かさや力を現わす「金の子牛」の像を作って拝みました。私たちが無意識に勝手な神のイメージを作る危険があります。

ここでは「拝んではならない、仕えてはならない」と命じられた後、「わたしは主(ヤハウェ)、あなたの神」と繰り返し、敢えて「ねたみの神」(20:5)と付け加えます。夫婦関係は自分の理想を相手に押し付け、あるがままを認め合わないことから破綻します。神をあなたの身勝手な理想のイメージに変えてはなりません。たとえば「神が愛なら地獄が空になるはず」という論理は自分の「愛」のイメージを創造主に押し付けることです。神の愛の代わりに、愛自体を神とするのは偶像礼拝です。

神は愛の交わりを切望されるからこそ、「わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼす」(20:5)と警告されます。実際、親の生き方の歪みは孫の代まで不幸にするという現実があります。これは神からの罰というより、必然的な現実です。

ただし神は、「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」との対比で、神を愛する者への祝福の永続性を強調しておられます。

3. 「あなたの神、主(ヤハウェ)の名をみだりに口にしてはならない」(20:7)

この解釈から、御名が「主」(アドナイ)と呼び変えられ、大贖罪の日に、大祭司が一度だけ、ヤハウェと発音するようになったと言われます。ただしこの命令の中心は「誓い」の際「むなしく、わざとらしく」御名を用いることの禁止でした(レビ 19:12)。

イエスも「『主よ。主よ。』と言う者が天の御国に入るのではなく」(マタイ 7:21)と言われ、軽々しく御名を使うことを戒めました。

御名の悪用は論外ですが、ヒトラーは「私は今日、全能の創造主の意識で行動すると信じている。ユダヤ人を抑え、主の御業のために戦う」と豪語し「神のかたちに造られた人」を殺しました。創造主の御名を勝手に使うことと隣人を軽蔑することは表裏一体です。

4. 「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ」(20:8-11)

「安息」(シャバット)は「神は第七日目に…なさっていたすべてのわざをやめられた」(創世記 2:2,3)の「や

める」に由来し、「休む」ことに誇りを与える教えです。人の価値が仕事能力で計られる人間社会で、「七日目は…主(ヤハウェ)の(ための)安息である…いかなる仕事もしてはならない」という命令は革命的です。

同時に、ここでは「息子、娘」ばかりか「奴隷、家畜、寄留者」までにも休みが命じられます。この日を創造主に聖別して、みことばを聴き、一緒に礼拝し、食事し、遊び、喜び合うのです。

まさにこの日には、隣人愛と被造物への愛が実践されます。卵に悪玉コレステロールが高いのは、鶏を機械のように扱いストレスをかけたからという分析もあります。家畜を休ませないことは自分の身を害することにもつながるのです。

イエスは「安息日は人のために設けられた」(マルコ 2:27)と言われ、これを「喜びの日」(イザヤ 58:13)へと回復してくださいました。私たちには、「神の安息に入るための約束がまだ残っている」(ヘブル 4:1)のですから、これを果たすべき義務としてより、やがて実現する真の安息の影として、喜び祝うべきでしょう。

5. 「あなたの父と母を敬え」(20:12)

「これは約束を伴う第一の戒め」(エペソ 6:2)とさえ呼ばれ、人間関係の核心の教えです。「敬え」とは、神を崇め恐れることに用いられる「栄光」と同じ語源のことばです。

これは親の良し悪しや年齢に関わらず、無条件の命令で、「あなたの神、主(ヤハウェ)が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするため」と記されます。エペソ書では「そうすれば…幸せになる」との「約束」と定義されます(6:1-3)。

確かに虐待を受け、親から離れなければ自由になれない人もいます。ただしそれでも、親を愛せないこと自体が悲劇であることは事実です。その人は神の愛も心から味わうことが困難になりがちです。親を敬うことなく本当の幸せを味わうことができる人はいません。

主は一人ひとりの出生をご存知の上で、各人がそれぞれのときに親を敬うことを可能にしてくださいます。それこそ最高の祈禱課題と言えましょう。

6. 「殺してはならない」(20:13)

生きる価値のない人は殺しても構わないという風潮は今もあります。つい八十年前に日本やドイツが行なったことを考えれば、これが三千年前にどれほど大きな意味を持ったかは明らかです。昔も、胎児や障害者、老人の命が軽んじられ、今も「中絶」という名目で、親が胎児を殺すことが後を絶ちません。

この簡潔な禁止命令の根拠は、「神は人を神のかたちとして造ったから」(創世記 9:6)という点にあります。すべての人は、目に見えない創造主のイメージを現わす、かけがえのない高価で尊い存在です。

そのため自殺も、安楽死も、神のみ旨とは言えません。創造主だけがいのちを与え、いのちを取り去る権威を持っておられます。

また殺しはしないとしても、「神のかたち」に創造された自分も他人も、無用の存在と決めつけてはなりません。それでイエスは「兄弟に…『愚か者』」(原文は「ラカ」当時の呪いのことば、『死ね!』というニュアンス)と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます」(マタイ 5:22)とさえ言われました。

7. 「姦淫してはならない」(20:14)

当時は一夫多妻が許され、力のある者が弱い者の妻を平気で奪うことさえありましたが、神は権力者

の横暴を抑え、すべての家庭が尊ばれるようにされました。なおイエスは、結婚を聖別し、結婚以外でのすべての性的な交わりを、姦淫の罪と見られました(マタイ 19:3-9、I コリント 6:16)。

聖書には他宗教のような戒律はありませんが、唯一性道德に関しては驚くほど厳格です。最近、同性婚を「結婚」と認めるべきかが人権問題になっていますが、本来、「結婚」とは、どの文化でも、男と女が互いへの献身を約束して結ばれるものと見られています。

それは「神は人を…男と女に…創造され…生めよ。増えよ」と言われた(創 1:27,28)、創造の原点に立ち返ることばです。神は「性」を「聖」の基準に引き上げさせようとしています。だからこそ、世の人々がキリスト教式の結婚式に憧れます。キリストこそが一夫一婦制を明確にされたのです。

8. 「盗んではならない」(20:15)

昔は、敗戦国の人の所有権が認められないのは当然で、権力者は民衆の財産を合法的に奪うことさえできました。

後にイスラエルの王アハブが、ナボデのぶどう畑を譲り受けられなくて悩んでいたら、シドンの王女イゼベルは、「今、あなたはイスラエルの王権を得ています」(I 列王 21:7)と言い、力づくで取り上げることを躊躇しませんでした。

しかしその結果、後に彼女の死体が犬に食べられるという呪いを招きます(同 21:23)。他国では当然のことでもイスラエルでは許されないことでした。ですからこれは権力者の横暴を抑え、社会的な弱者の生存権を守る命令だったのです。権力者は自分の横暴を正当化しがちです。

9. 「隣人について、偽りの証言をしてはならない」(20:16)

当時は少しの罪でも死刑になりましたから、偽りの証言は破壊的でした。先の例ではアハブの妻イゼベルが町の二人に「ナボデが神と王を呪った」(同 21:13)と偽証させ、彼を死に追いやり、ぶどう畑を奪いました。それは北王国の首都サマリヤの墮落の象徴的な出来事でした。

現代は、噂話しによって、人の名誉を傷つけることが戒められるべきです。名誉は人間にとって最高の宝であることを忘れてはなりません。

10. 「隣人の家、隣人のものを欲してはならない」(20:17)

「欲してはならない」と二回繰り返されます。これは心の内に隠された思いが問題にされています。先の例でも、アハブはナボデからぶどう畑を買い取りたいと思ったことから悲劇が始まりました。すべての罪は、「欲しがる」という思いから始まります。

後にパウロは、「私は…律法による義については非難されるところのない者でした」(ピリピ 3:6)と言っていました。この点に関しては、「罪は戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆる欲望を生み出しました」(ローマ 7:8)と、自分の罪深さを認めざるを得ませんでした。「隣人のものを欲してはならない」と言われれば言われるほど、欲望の衝動が働いたのです。

エデンの園での最初の罪は、「その木は賢くしてくれそうで好ましかった(be desired: 欲しくなった)。それで、女はその実を取って食べ」(創世記 3:6)と描かれ、欲しくなったことが悲劇の原因でした。

その子孫である私たちも獲得することに喜びを感じますが、救い主イエスは、失うことの中での自由と祝福を保証してくださいました。

<「十のことば」に伴う「恐れ」、そこにある神の熱い思い>

なお、この主の御声を聞いたイスラエルの民は、「雷鳴、稲妻、角笛の音、煙る山を目の前にして」「身震いし、遠く離れて立った」と描かれています(20:18)。彼らはモーセを通して神の教えを聞きたいと願い、「神が私たちに(直接には)お語りになりませんように。さもないと私たちは死んでしまいます」(20:19)と言いました。

それに対してモーセは、まず「恐れることはありません」(20:20)と言います。それは主ご自身が彼らを真の意味で生かすために、この地にまで降りて来られたからです。

ただそこで「あなたがたを試みるため」とも言われます。それは神が与えた試験、訓練ですが、そこでは同時に「あなたがたが罪に陥らないよう、神への恐れがあなたがたに生じるため」(20:20)と記されます。

神は、敢えて、彼らの心に恐れを抱かせるような現実を見せつけることによって、彼らが主を恐れ、主の命令を真剣に受け止めるようにと導いておられます。

「恐れることはありません」と言いながら恐れさせるとは、人間の理屈を超えています。神が私たちに近づきこのようにしてくださるのは、私たちが真の意味で「神のかたち」として生きられるためです。それを恐れる必要はありません。

しかしそのかけがえのない御教えを軽く扱う者には、厳しいさばきが待っているという「恐れ」をも持つ必要があります。私たちも、そのような恐れがなければ、イエスを救い主として求めようとする気さえ起きないことでしょう。

「十のことば」は私たちを生かす教えですから、それを恐れる必要はありません。しかしこれが与えられた理由を「恐れ」をもって受け止めない者には自滅が待っています。

もしイスラエルが「十のことば」を守っていたら、彼らの国は平和のうちに繁栄し、創造主にとっての「宝」の民として全世界の憧れとなり、また「祭司の王国」として、主(ヤハウェ)のすばらしさを全世界に証しすることができたはずでした。

そしてこの教えは現在の私たちにも平和と繁栄と幸福を与える規範です。

神は私たちを「一人の夫キリストに献げるために婚約させた」(第三版:「ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにした」)(Ⅱコリント 11:2)上で、「心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主(ヤハウェ)を愛しなさい」と命じられました(申命記 6:5)。これこそ第 1～4 教えの要約です。

また、当時も今の独裁国家でも、社会的弱者の生命、家庭、財産、名誉の権利が軽んじられましたが、神はご自身が神の民の王として、人と人とが愛し合う共同体を造ろうとされました。それが第 4～10 の教えであり、その要約が「あなたの隣人を、あなた自身のように愛しなさい」(レビ 19:18)です。

そして、安息日の教えこそは、十のことばの前半と後半を合わせる結びの帯の位置にあります。

パウロは「恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです…行いによるものではありません」と言いながら、その直後に「神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださいました」と言いました(エペソ 2:8-10)。

その備えられた良い行いの基準がこの「十のことば」であり、それを私たちは肉の力によってではなく、神から与えられた聖霊によって全うさせていただくのです。確かに、私たちは何度も失敗しますが、イエスの十字架の赦しのゆえに何度でもやり直すことができます。